

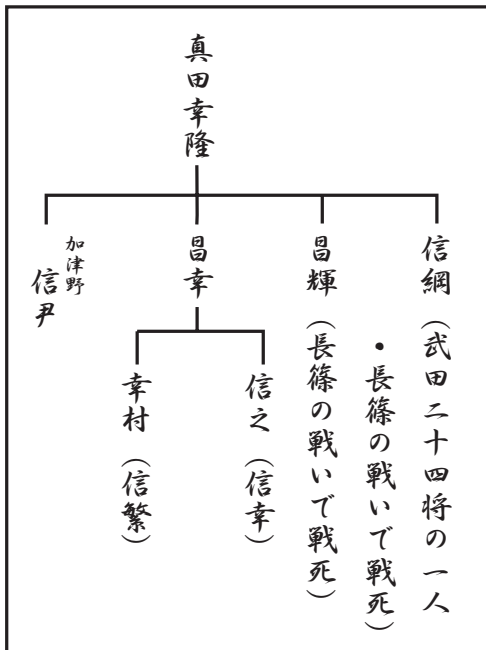
「生き残りへ 智略縦横 真田三代」(第一回)

講談師 一龍斎貞花

今年の大河ドラマが「真田丸」。

大坂の陣に、幸村が築いた出城である。立川文庫によつて幸村が有名になったが、真田家が独立した大名として後世まで生き残つたのは、三代の智略縦横の働きがあつたからこそ。

「ナニツ、あの要害堅固の砥石城がたつた一日で落ちたと」



「真田幸隆め、どのような手を使いおつたか」

弓矢の聖とうたわれる武田信玄が、村上義清のため敗北を喫した砥石城を、わずかな兵力で奇襲をかけ、たつた一日で落城させ武田の家中に驚きが広がった。

一門禰津家ゆかりの甲賀の忍びの者

や、通行手形がいらす諸国を自由に廻ることの出来る巫子と呼ばれる歩き巫子や、山伏を使つて情報を集め、義清の家来の中には、一度は信玄に勝つたものの勢力を伸ばす信玄の力を恐れる者もあり、その者達に「砥石城を落城させて

も御身達の領土は必ず安堵すると信玄公は約束されておる、これは信玄公からの甲州金でござる」

所領安堵と金によつて裏切らせ、一日にして落城させたのでござりました。

真田は、清和天皇の流れを汲み、立川文庫の真田十勇士の中に根津甚八がいるが、この一門と思われ、禰津甚八と書くのが正しいのではなからうか。

信州の小豪族海野氏の娘婿が真田荘に居を構えたところから真田を名乗る。源頼朝の家来に、海野小太郎幸氏。その十七世が真田源太左衛門信綱(幸隆長男・長篠で弟昌輝とともに戦死)。

海野一族は、武田に攻められ信州の地を追われ上州へと逃れ、幸隆は関東管領上杉家に仕えていたが、信玄の将来性を見込んで名門上杉家を見限つて

武田家へ。幸隆を中心に、矢沢頼綱常田隆家の第二人、長男信綱、二男昌輝、三男源五郎(昌幸)の三人の伴。

「源五郎、そなた甲斐へ行け。よいか、お屋形様でさえ落とせなかつた砥石城を落したことで、これまでのように見下ろされることもなからうが、それ以上我等の力を警戒されておる。生き残るためには身を低くして、そのためそちを人質として送るのじや。信玄公は弓矢の聖といわれるほどの武将、家来も一騎当千の強者揃い、その強さを、そなたの眼でしっかり見定めるのだ、よいな」

幸隆はその後信州の小豪族を次々と調略し、信玄の信濃平定に大きな力を発揮し、中途採用された外様でありながら譜代の家臣と同等の待遇を得て

いき、源五郎は、信玄の奥近習にまで取立てられ、信玄のもとで元服し昌幸と改め、信玄の母大井夫人ゆかりの武藤家を継ぎ、武藤喜兵衛昌幸を名乗り、長男源三郎（信幸）、二男源次郎（幸村）と二人の男子に恵まれます。

武田に追われた村上・小笠原が上杉謙信を頼ったことから川中島の戦いへと発展。謙信は

「わしが弓を取って戦えば真田に負けることはないが、智略は遠く及ばぬ、真田がいる限り信濃を奪うのはむづかしい」と、幸隆を評価。

幸隆は、一時存亡の危機にあつた真田家を智略と胆力で立て直し、砥石城、尼巖城に続いて、上州への足掛り群馬の岩櫃山、標高八〇二メートルながら険阻な岩山の中腹にある岩櫃山城を落とし、昌幸と倅信幸が支配し、岩櫃山は真田忍びの者の鍛錬の場となります。高山城、白井城他信濃・上野の城を攻略し、武田の武将として上州吾妻郡の支配をまかされます。

兄二人戦死、昌幸家督相続

信玄は、三方ヶ原の戦いで徳川家康を完膚なきまでに叩きのめしたものの体調すぐれず五十三歳で死去。

幸隆は、天正二年五月十九日六十二歳で亡くなり、長男信綱が家督を相続。

信玄という偉大なカリスマが世を去ったとはいえ、武田家は駿河、信濃、飛騨まで領土を広げ、後継ぎの勝頼は、父信玄が攻略出来なかつた高天神城を攻め落とし、「父に負けてなるものか」と、なにかにつけて「お屋形様は」と意見する老臣たちと対立。

二世の陥る大きな原因です。今の時世では先代の成果を守るだけでも容易ではありません。呉々も勝頼にならぬようご注意ください。

天正三年、重臣たちが「戦うべきではござらん」と進言するも聞き入れず長篠の戦い。織田信長の三千丁の鉄砲によって騎馬軍団次々と撃ち倒され、この戦いで武田二十四将の一人となつた長男信綱、二男昌輝討ち死、生き残つた昌幸が武藤から真田家の当主となつた砥石城へ戻ります。

「わしは一族興隆のため、沼田を奪おうと考えておる」

関東の要衝の地、上杉・北條・武田が争奪戦を繰り広げた沼田。

「父が手にしたかつた沼田、必ずや手に入れてみせる」

かつて謙信は、関東進出の際、峠を越えて上野の国へ入ると、沼田城で軍備、兵站を整え戦いにのぞんだ城。

上杉と北條が一時同盟を結んだ際、人質となつた氏康の七男景虎を、謙信自ら出迎えたのもこの城。厩橋城と並ぶ関東における上杉一大拠点。

謙信が亡くなるや二人の養子景勝と景虎の相続争い。この時勝頼は、北條有利と見て景虎を支援。すると景勝の腹臣直江兼続の使者が、一万両と信濃及び上野国内の上杉領の半分を武田方に譲るといふ破格の条件に、勝頼は北條との同盟を破棄し

「この機に乗じて沼田を奪え」と、吾妻の郡代を務める真田家に命令が。命令されたから取りに行く昌幸ではありません。父幸隆の望んだ城、自らのものにした。

越後と関東を往き来する荷は必ず沼田を通る。この沼田を抑えれば信濃と上野を結ぶ物流の道を完全に掌握する

ことが出来るのです。

利根川の東は北條。川の西は沼田を中心として名胡桃城はじめ、小川、下川田、諏訪ノ木、宮野の各城は上杉方。

昌幸は当時、領内菅平で牧場を営み大黃・人参などの薬草を育てて調合し、山伏たちが売って歩き財を蓄えていた。景勝につくか、景虎につくか上野の豪族が混乱に陥ちいつているのを幸いと、稼いだ金袋を惜し気もなく与え、かくして昌幸は、上杉支配下の名胡桃城はじめ次々と攻略。

そして沼田の重臣にも「謙信公亡きあと上杉家は乱れておる。武田に味方すれば勝頼様から多大の恩賞を下されるぞ」

甘い言葉に重臣が寝返り、遂には血を流すことなく沼田を手に入れたのでございます。

武田家滅亡後も、織田・北條・徳川・上杉と天下騒乱の中、沼田を巡つて二転三転。さらに真田家の拠点上田城に展開される攻防。生き残りのための智略の数々。次回お楽しみに。ポポーン■